

## 罪の明暗

作・上杉政徳（戯曲奏者）

人もまばらな小さな喫茶店。店内にはマスターの趣味だろうか陽気なジャズが流れ、落ち着いた雰囲気だ。客は僕と友人の武田、マスターと喋っている初老の男性、親子に見える女性の二人組、一人で小説を読んでいる男だけだった。

僕と武田は特に長い付き合いというわけでもないが、僕のことをよく理解し、よくしてくれる。今日も夜から僕のもう一人の友人と会うまでの時間潰しに付き合ってくれている。噂をすればなんとやら、そのもう一人の友人から電話がかかってきた。待ち合わせ場所を指定するものだったが、それはいつもと同じ、あの廃ビルだ。電話が終わると武田が話しかけてきた。

「電話の相手、神谷って言ったっけ？そろそろ会わせてくれないんじゃないか？」

「彼が嫌がるんだ。ひどい人見知りらしくてね。」

「いつもその調子だな。実は女なんじゃないか？すごい美人だから俺に会わせたくないとか。」

「そんなんじゃないさ。僕は彼の意見を尊重したいだけ、彼がいいと言えばすぐにでも会わせるよ。」

「ふーん。何かの先輩なのか？昔お世話になったとか。」

「彼は僕と同じ年だよ。でも彼には感謝してもきれない程お世話になったんだ。」

「待ち合わせの時間までまだあるんだろ？その時の話、聞かせてくれよ。」

—そして僕は語りだした。神谷と僕の奇妙な出来事を。—

目が覚めると見慣れない部屋にいた。清潔な部屋に真っ白なシーツが目に入る。体がうまく動かない。ここはどこかと考える前に一人の男が部屋に入ってきた。彼は僕を見ると少し驚いたように話しかけてきた。

「目が覚めましたか。ここは病院ですよ。」

「あなたは、誰ですか。」

「私のことを覚えていませんか。では昨日や一昨日のことは？」

僕がその質問に答える義務などないと思った。しかし彼はここを病院だと言ったし、ひよっとしたら医者なのかもしれない。いや、そんなことより僕はなぜ病院なんかにいるのだろう。まあいい、彼と話していればわかるはずだ。

「一昨日は彼女と会っていました。昨日は…一人で出掛けていました。」

「お一人で、どちらへ？」

「一昨日に彼女とケンカをしましてね。昨日は深夜までヤケ酒です。家の酒が切れたので飲み屋に行きました。」

「その後のことを覚えていますか？」

「その後？店を出て…えっ？」

「思い出しましたか？アナタが今ここにいる理由は、交通事故です。」

「僕は…なんで…えっ？」

僕の頭は完全に混乱していた。その一番の理由は自分の名前がわからなかったからだ。一昨日のことは覚えているし、昨日のヤケ酒のことも覚えている。事故の瞬間に相手と目が合ったことも覚えているのだ。しかしそれは断片的なものだけ、自分の名前も住所も思い出せない。目の前の彼は突然様子がおかしくなった僕を心配して声を掛け続けている。僕は急に心細くなって目の前の彼に事情を話した。彼も動揺したようだが、大きく深呼吸をしてからこう言った。

「もう一度聞くけど、私のことも覚えてないのかい？」

「すみません…。」

「いや、謝らなくていいんだ。ところで…君、お金は持っているかい？」

「お金ですか？少しは持っているはずですが…。」

「保険証や銀行の通帳は持っているかい？」

「えっと…僕の荷物は…。」

「君がここに運ばれた時、君は何も持っていなかったよ。」

「そうですか…じゃあ家に置いてあるのかな。」

「住所は思い出せなくても家の場所はわかるかい？」

「…いいえ。」

僕はすっかり困っていた。ここは病室、少なくとも僕は入院していたようだ。自分の名前も住所も思い出せない僕が手ぶらだということは、退院しても帰る場所もないどころか、病院に入院費を支払うことすらできないということになる。仕事をしていたかもわからないのでサラ金にお金を借りることもできないだろうし、頼れる友人がいるかどうかもわからない。

そんな僕の考えに気付いたのか、彼は僕にしばらく待っていてくれと言って部屋を出た。三時間経つただろうか、彼は紙袋を持って戻ってきた。僕のために服を用意してくれたそうだ。僕は彼に言われるままに病衣からその服に着替え、彼に付いてロビーへ向かった。そこでまた10分程待たされ

だが、僕は文句など言えるはずがない。彼は僕の入院費を立て替えてくれているのだとわかっていたからだ。僕は申し訳ない気持ちと感謝の気持ちで一杯だった。僕の元へ戻ってきた彼はまた紙袋を持っていた。事故の時に僕が着ていた服が入っているらしい。僕はそれを受け取り、とりあえず私の家に行くと言う彼の言葉に甘えた。恥ずかしい話だが、僕は彼のその言葉を待っていたのだ。

彼の部屋に着くと、事故の時に着ていたという服のことが気になっていた。自分の手がかりになる物がポケットなんかに入っていないかどうかを確かめたかったのだ。彼の承諾を得てからその服を床に広げ、全てのポケットを探してみた。すると上着の内ポケットに、畳まれた1枚の紙が入っていた。何かの案内のようで、挨拶文と簡単な地図、そして【林様へ】という文字があった。僕は林という苗字らしい。…しかし記憶が戻ることはなかった。そんな僕の様子を見ていた彼が口を開いた。

「私は神谷陽一。林君、記憶が戻るまでここに居ていいよ。」

「すみません…。ありがとうございませす。」

「テレビも何もない部屋だけど自由に使ってくれていいから。帰ってくる場所がわからなくなるかもしれないから、外には出ないほうがいい。」

本当に何もないような部屋だが、彼の言葉がありがたかった。その日は二人でカップラーメンを食べて、彼の用意してくれた布団で寝た。次の日は朝から仕事だと言った彼に気を遣って、叫びだしたいような不安を押し殺して静かに眠った。朝から出掛けた彼を見送ってから、僕は座卓に置いてあった新聞を読み始めると、そこには衝撃的なことが書かれていた。それは事件や事故ではない。日付だ。

僕が最後に覚えていた事故の日から病院で目が覚めるまでの時間、一夜のことだと思っていたその時間は、一ヶ月。僕は事故から一ヶ月の間眠り続けていたのだ。道理で思うように体が動かないわけだ。―ということは彼は一ヶ月分の入院費を立て替えてくれたのか。僕は申し訳ない気持ちが増したが、すぐにお返しできることとなると何も思い付かなかった。そういえば、今さらだが彼は何者なのだろうか。神谷と名乗ったが、まったく記憶にない。自分の名前も忘れていた僕がそんなことを言っても信憑性がないが、彼の行動からしても昔からの知り合いではないはずだ。もしそうなら僕の名前くらい知っているだろう。キツチンの隅に古新聞が山になっているのを見つけ、事故の日の新聞を探し出して全ての記事を読んでいた。事故の記事を読んだ時、僕は気を失いそうになった。そこには信じ難いことが書かれていたのだ。

深夜の飲酒運転による事故、被害者の男性は神谷陽一、加害者は林雅彦。つまり僕は…加害者だったのだ。しかも彼は医者でも知り合いでもなく、僕が事故を起こした相手だった。その記事を読んで事故の瞬間の記憶が蘇った。僕は確かに彼と事故を起こしている。あの時目が合った相手、暗く相手の顔がよく見えなかったが、あの顔は確かに彼だったのだ。

僕はしばらく放心状態だった。ドアを開ける音で我に返ると、窓から見える空が夕日に染まっていた。仕事を終えた彼が帰ってきたようだ。僕は突然怖くなった。どんな顔をして彼と会えばいいかがわからなかった。何もできずに頭を抱えてうずくまっていると、背後から彼が話し掛けてきた。

「記憶は戻ったかい？」

「本当に申し訳ありません。僕…本当に何も覚えてなくて…。アナタのことも誰だかわかつてなくて…事故のことも…さつき新聞で読んで…本当に…申し訳ありません…僕…事故のことを償うどころかこんなにお世話になって…その…」

その時の僕は見るに耐えない程に無様だっただろう。しかし他に何ができるといえるのか、記憶を失い、お金もなく、事故の加害者が被害者に頼っているこの状況で、無様に泣き崩れながら謝る他に何が出来る。彼が許してくれるかどうかなど関係ない。僕は罪悪感と自分に対する嫌悪感から謝り続けた。すると彼は僕の肩に手を置き、ゆつくりと話始めた。

「記憶が戻ったのは事故のことだけかい？」

「はい…事故の瞬間、アナタと目が合ったことだけです…本当に申し訳ありません…。」

「…しようがないじゃないか、過ぎたことは。今の僕はこの通り元氣だし、林君も目が覚めたことだし。」

「ありがとうございます…必ず…お返ししますから…入院費もお世話になった分も…何年かかっても必ず…」

彼はそれからすぐ、仕事の関係で引越しをしたらしい。元々引越す予定だったが、僕を安心させるために黙っていたそう。新居の場所は知らないが携帯電話の番号は聞いておいた。僕は未だに記憶が戻らないままだが、どうにか仕事を見つけ、毎月の給料から少しずつ彼にお返しをしている。

「僕のこと軽蔑したかい？」

呆然としながら話を聞いていた武田に尋ねると、ゆつくりと左右に首を振りながら、いい話だ、だとかそんな人いるんだな、だとか単調な言葉を繰り返している。僕の人生に起こった奇妙な話は、武田にはインパクトの強いものだったようだ。

「そのお返しはどれくらいの期間続けているんですか？」

一人で小説を読んでいた男が突然話掛けてきた。

「ああ、失礼。一人で退屈だったのでお話を聞かせて頂きました。私は植本と申します。それで、お返しはどれくらいの期間続けているんですか？」

「あ、いえ。急に話し掛けられたので…そうですね、もう5年になります。でも僕は神谷さんがもういいと言うまで続けるつもりです。」

「そうですか。ふふつ…あ、いえ、失礼。今日もお返しのために神谷さんとお会いになるんですか？」

「ええ。ここからすぐの廃ビルで待ち合わせです。」

「それはそれは。待ち合わせはいつもその廃ビルで？」

「はい。なんなんですか？アナタは。」

「ふ。ふ。あ、失礼。いえね、大した人もいるものだなあと思っています。」

「そうでしょう。僕も神谷さんのことは尊敬できる人だと思つています。」

「尊敬？ふ。ふ。…冗談でしょう。神谷さんは実に賢いが、アナタはその神谷さんを尊敬などしてはいけませんよ。」

「何なんですかアナタは！失礼にも程がある！武田、悪いけど僕はもう行くよ。こんな奴と同じ場所に居たくないからね。」

まだ軽く呆然としている武田を置いてレジに向かった。会計をしている途中、あの男が大きな声で僕に話し掛けてくる。

「こんな奴で結構。でもこれだけは聞いてください。アナタが思い出したという事故の瞬間。神谷さんと目が合った瞬間のことをよく思い出して下さい。暗くてよくわからなかったとおっしゃいましたよね。アナタはそれでも…」

男はまだ喋っていたが僕はもう相手にする気がなかった。会計が終わるとさつきと店のドアを開け、待ち合わせ場所のいつもの廃ビルに向かった。もう外は暗くなり始めていた。廃ビルの中は真つ暗でなにも見えない。だがいつものことなので怖いとも思わない。鞆から懐中電灯を取り出して奥へと進む。神谷さんがいない。今日はあの男のせいで早く着いてしまったようだ。神谷さんを待っているとあの男の最後の言葉が頭をかすめた。

—事故の瞬間、神谷さんと目が合った瞬間のことをよく思い出して下さい。—

何を言つてるのか。思い出せも何も、あの男はその瞬間のことを知らないじゃないか。大体僕は酔つ払つていたし、深夜のことだから周りは真つ暗だ。この廃ビルのように。

—暗くてよくわからなかったとおっしゃいましたよね。—

その通りだ。だからすぐには思い出せなかった。すぐに思い出せていたらこうはならなかった。退院の時も神谷さんがいなかったら事故当時の服の…などと考えもしなかっただろう。神谷さんが服のことに気付いてくれたから僕の名前がわかったのだ。

廃ビルに足音が響いた。神谷さんが来たのだろう。僕を呼ぶ声が聞こえる。懐中電灯を忘れたのだろうか。僕は神谷さんの声のする方向に懐中電灯を照らしながら歩いた。人影が見えたので、その顔を向けるとやっぱり神谷さんだった。

あの男、植本と名乗っていたな。まださつきの喫茶店にいらさうか。急にもう一度会いたくなった。あの男が言った言葉の意味がたった今わかったからだ。ちゃんと話を最後まで聞いておけばよかった。僕は今夜、目の前に現れたこの神谷という男を殺してしまうかもしれない。